

談話分析に活かす英文学と英語学の「視点」

宇佐見太市（関西大学）

山本英一（関西大学）

1 「視点」の問題

話し手もしくは語り手が何かを語ろうとしたとき、彼（女）は基本的にはみずからの視点から状況を描写することになる。つまり、私（たち）が事態を眺めつつ言葉を駆使する一人称の世界が展開するはずである。しかし、同じ一人称の世界でも、当の話し手・語り手が、いかなる眺望から、その状況にどのように関わるかによって、おのずと表現様式は変わってくるようである。たとえば、「昨日は雨が降った」は話し手が個人的な思いを添えることなく、事実を事実として報告しているにすぎないが、「昨日雨に降られた」は〈迷惑の受身〉とも言われるように、話し手の場面に対する（少なくとも前者より）濃密な関与と、そこに生じた個人的思いを伝えている。言語学では、Kuno & Kaburaki (1977)が〈共感度〉(empathy)の概念を、わかりやすくカメラ・アングルとも言い換えながら、説明を試みている。先の例にもあるように、日本語は「れる/られる」、「あげる/もらう」などの形態素に反映されるのに対して、英語では、むしろ固定化された語順の中で「主語」という形で話し手の視点が立ち現れる。

このように、視点を言語化する仕組みが言語によって異なることは、言語の多様性から当然予想されることであろう。同時に話し手が描写している状況に積極的に関わりつつ個人の思いを盛り込むとき（主観的描写）と、中立的に淡々と事実を伝えるとき（客観的描写）の二つスタイルが同一言語の中にも存在していることは、先ほどの日本語の「雨降り」の例からも明らかである。しかし、本論で問題としたいのは、次の例に見られるように、同じ場面でありながら、主観的な描写に偏りがちな言語（＝日本語）もあれば、客観的な描写にならざるを得ない言語（＝英語）もあるという点である。

(1) 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。(川端康成『雪国』)

(2) The train came out of the tunnel into the snow country. (E. Seidensticker 訳)

長いトンネルの暗闇を抜けたとき、まさに列車に乗っている語り手の視界に白銀の世界が飛び込んできたという日本語のイメージは、もはや英語には感じられない。それは、語り手を乗せた列車が雪国に入ったという事実の報告でしかないからである。もちろん、ここでは、臨場感のある場面描写と、淡々とした感じの客観的描写を比較して、その文学的秀逸性を議論しようというわけではない。いずれの言語にも、おそらく主観的描写と客観的描写二つのスタイルが存在しているはずなのに、ふとした表現の中に、一方では主観的描写が自然に生起するのに、他方では客観的描写が立ち現れるのはなぜなのか。そのような素朴な問いかけである。(1)の日本語をあえて(2)のような描写方法に変えてしまうと、その本来の持ち味が失われてしまう。逆もまた真なりで、(2)の英語をあえて(1)のごとき日本語に意識してしまうと、場面の主体が何（あるいは誰）なのか、その明確さが失われてしまう。ゆえに、両者の違いは、単に語り手個人の文体的嗜好の問題として片づけられない。

それは、もはや個人のレベルを超えている。日本語と英語が、それぞれ場面を描写するときには依存する視点の傾向といってもよいだろう。つまり、言語を論じる上でもっと本質的な問題へとつながるといのが本論の主張である。

## 2 類型論的な特徴としての「視点」

認知言語学では、モノやコトはあらかじめ存在するのではなく、言語使用者が外界と積極的に関わる中で、いずれの部分かに注目し、コトバを使ってそこを何らかの形で切り出すことによって始めて、モノやコトが顕在化すると考える。したがって、視点の問題は重要である。たとえば、池上(2004)は、認知の主体(=話し手)が事態を臨場的に把握するケースを〈主観的把握〉(subjective construal)と呼び、認知主体がいわば自己の分身を創出し、事態を客観的に把握するケースを〈客観的把握〉(objective construal)と呼び、二通りの視点の違いを重要視する。

同種の区別は、舞台のメタファーを使って説明を試みる Langacker (1991)にも現われる。すなわち舞台上(onstage)から事態を眺める視点と、舞台から外れ(offstage)観客席から舞台上で展開する事態を眺める視点である。Langacker は前者を〈最適の視点配置〉(optimal viewing arrangement)、後者を〈自己中心的な視点の配置〉(egocentric viewing arrangement)と呼び、それぞれ図1と図2のような構図を想定している。

### (3) a. Optimal Viewing Arrangement

In this maximally asymmetrical arrangement, the entity construed subjectively is implicit and hence nonsalient—to use the theater metaphor, *it remains offstage* in the audience—whereas the objectively construed entity is salient by virtue of being placed onstage as the explicit focus of attention. (Langacker 1991:316: italics added)

### b. Egocentric Viewing Arrangement

When this happens, *V(=Viewer)* may not only be self-aware (hence included in *PF(=Perceptual Field)*), but *can even go onstage*, taking its place within an expanded, egocentrically determined *OS(=Onstage)* region. (Langacker 1991:317: italics added)

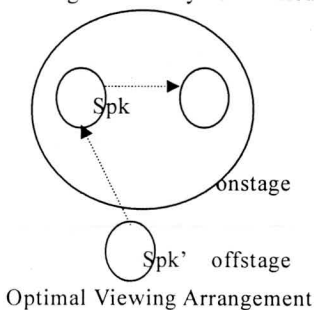


図 1

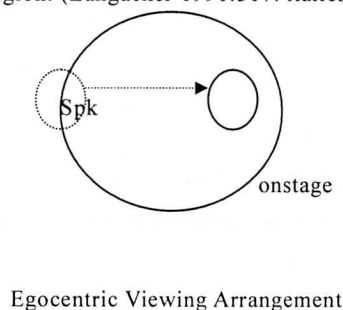


図 2

池上(2004)の用語あるいは Langacker (1991)の用語のいずれにしたがうにせよ、客観的視点においては、描写の対象にもなり得る「自分」から、語り手としての「自分」をいった

ん切離すこと、すなわち自己を分離することが求められる。一方、主観的な視点においては、語られ得る「自分」と語る「自分」が同一であって、いわば現場に自己を投入することが求められるといえる。次の例は、それぞれの視点を象徴する例文である。

- (4) a. I find myself searching the crowds for your face.  
 b. (ふと気がつく) 人ごみの中であなたの姿を探し求めているのである。

以下は、英語の視点と日本語の視点をそれぞれ簡略に図示したものである。

英語の図式 (= 例文(4) a.)

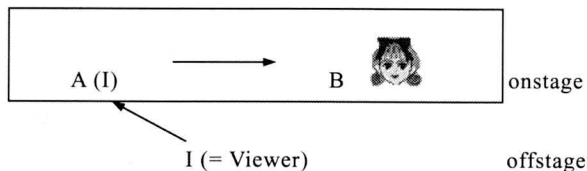


図 3 (a)

日本語の図式 (= 例文(4) b.)

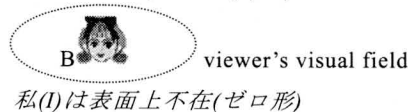


図 3 (b)

英語においては、描写主体である自分(= I)と描写対象としての自分(=A)が分離していて、『「あなたの姿(B)を探している私(A)」を私(I)が見ている』という、いわば入れ子型構造になっている。一方、日本語では、その場に居合わせた自分自身が、臨場的に(今此处で)「あなたの姿を探している」。しかも、話し手は自分以外の人物ではあり得ないから、わざわざ言う必要はなく、「私」は表面上不在、すなわち統語的にはゼロ形となるのである。同じ状況を描いていながら、自然な表現をもとめたとき、英語では自己を分離する方向へ、日本語では自己を現場に投入する方向へと向かいがちな点に注目すべきであろう。<sup>1</sup>

### 3 デフォルトという考え方

言語活動を含めて、身の回りで生起する事象に対して、「実はそうではない」と何らかの形で否定されるまで、私たちはある種の想定を行うことが許されている。たとえば、「銃声に驚いてトリが逃げた」という報告を聞いたとき、私たちは「トリが飛び去った」と考えがちであり、実際ほとんどの場合それでよい。しかし、たとえば、そのトリが「ペンギンだった」とか「翼を傷めていた」といわれた瞬間、その想定は無効となる。このような想定は一般的に〈デフォルト推論〉(default inference)と呼ばれている。その詳細についていま触れる余裕はないが、ここでは談話に限定してデフォルトの概念を考えてみたい。<sup>2</sup>

たとえば、次の下線部の内容、すなわち「あなたの論文が試問委員会に提出されたとき、

大きな反響がありハーバード大学出版から出版されたうえ、いまでは法医学を専門にする人たちの必読書になっている」は、本来ならば Toby の言葉であり、Toby の信念だと考えても差し支えない。

(5) "Is it also true," continued the distinguished QC (=Toby), "that when your thesis was presented to the examining board, it created such interest that it was published by the Harvard University Press, and is now prescribed reading for anyone specializing in forensic science?"

"It's kind of you to say so," said Harry, giving Toby the cue for his next line.

"But *I* didn't say so," said Toby, rising to his full height and staring at the jury. "Those were the words of none other than Judge Daniel Webster, a member of the Supreme Court of the United States." — J. Archer, *To Cut a Long Story Short*

事実、直後に Harry が「あなたにそういってもらって恐縮です」と言っているのも、そのような想定に基づいているからである。ところが、ここではどんでん返しがあって、「いや私の言葉（信念）ではなくて、誰だろう、かの有名なウェブスター判事という言葉なのです」と Toby が切り返す。短い談話ではあるけれども、素直に「ウェブスター判事が言った」というよりも、はるかに劇的な効果をもたらしていることは一目瞭然であろう。

そのようなレトリックの問題はさておき、ここで問題としたいのは、そういった効果の背景にある想定である。この想定を〈談話のデフォルト〉と呼ぶことにする。

談話のデフォルト (1) : 発話・信念の帰属

そうでないという断りがない限り、談話における発話はその話し手自身の言葉であり信念である。

上の例は、談話において発話そのものが誰に帰属するのか、ひいては誰の信念を表したものののかに関して、私たちが無意識のうちに行なう推論であるが、談話における視点についても、同様のデフォルトがあることに気づく。少し長目の引用になるが、次の例で考えてみよう。

(6) It was on August 26th – I shall never forget it – that I received a letter which made me realise it might be necessary to follow every word of the trial. However much I tried to convince myself I should explain why I couldn't do it, I knew I wouldn't be able to resist it.

He (=The judge) went back over all the evidence, trying to put it in perspective, but he never gave as much as a hint as to his own opinions. When he had completed his summing-up late that afternoon he sent the jury away to consider their verdict.

I waited with nearly as much anxiety as Menzies must have done while I listened to others giving their opinions as the minutes ticked by in that little room. Then, four hours later, *a note was sent up to the judge.* (.....)

**The jury disappeared downstairs again to consider their deliberations, and did not return to their places for another three hours.** I could sense the tension in the court as neighbours sought to give opinions to each other in noisy whispers.

“Would the Foreman please stand?”

I rose from my place.

“Have you reached a verdict on which at least ten of you are agreed?”

“We have, sir.”

“Do you find the defendant, Paul Menzies, guilty or not guilty?”

“Guilty,” I replied.

— J. Archer, *A Twist in the Tale*

まず談話は「私」の視点から展開される。一通の手紙がきっかけとなって、ある事件の裁判の行方に筆者が関心を抱かざるを得なくなったという趣旨の話である。ところが、「メモが判事に届けられた」という受身文（イタリック体の部分）のあと、「私」の姿は一時的に談話から消え去り、その代わりに「陪審員」の動向（ゴチック体の部分）が前面に押し出される。その後、直接話法のやり取りに戻ると同時に、「私」が再登場するという按配である。

仮に三人称を中心に語られる物語であっても、その背景には必ず一人称で表わされる語り手（話し手）の存在がある。ましてや、「私」を中心に展開する上の談話は、話し手の存在を読者に強く印象づける。そのなかにあって、（語り手としての）「私」から「陪審員」への人称転換は、話し手の視点が「私」から「私以外の人」へと移行したことを意味する。つまり、「私」では指し得ない、そして「読者」をも含み得ない、三人称へと視点が移動したのである。当然「陪審員」に（語り手である）「私」は入らないという〈含み〉(implication)も生まれる。

ところが、(5)の例と同じく、ここでもどんでん返しがある。つまり、最後のやり取りから、「陪審員」には「私」も含まれていることがわかるのである。それどころか、「私」は陪審員長として被告に対して有罪の判決を宣告する立場にあった。同時に、ここでやっと、裁判に対して「私」の関心を引きつけた「一通の手紙」とは、裁判所からの召喚状だったことがわかる仕組みになっているのである。

読者は「だまされた」と思うだろう。The jury disappeared downstairs... and didn't return to their places...の部分は、本来 I（あるいは We）went downstairs...and didn't come back to my（あるいは our）places と表現されるべきなのである。わざわざ、視点が「私」から「私以外の人」へと移行したという、いわば「断り書き」があったにもかかわらず、その暗黙の指示に読者は裏切られた形になる。裏返すと、私たちは次のような〈談話のデフォルト〉を想定しているともいえる。

談話のデフォルト（2）：発話の視点

そうでないという断りが無い限り、談話における発話はその話し手自身の視点（すなわち、話し手自身を含む視点）から行われる。

(6)の例のおもしろいところは、「そうでないという断り」によって、視点に関する談話のデフォルトがキャンセルされてしまうことにトリック（＝どんでん返し）の源が隠れている点である。

#### 4 視点の移動（自己同一化と客観化フィルター）

第2節でも指摘したように、同じ「自己」といっても、現場に居合わせる生身の「自己」もあれば、記号化された（フィクションとして語られる）「自己」もある。ここに第三者が語り手として関わってきたとき、どうなるか？ 前者においては「第三者」に「自己」が重なる（＝乗り移る）形で〈自己同一化〉が起こる。後者においては、あくまでも登場人物を客観的に眺める「自己」は舞台の外にいて、「第三者」というフィルターを通して、事態が語られることになる。前者は〈自己投入型〉の視点であり、後者は〈自己分離型〉の視点である（図4(a)/(b)を参照のこと）。

自己投入型  
（日本語）

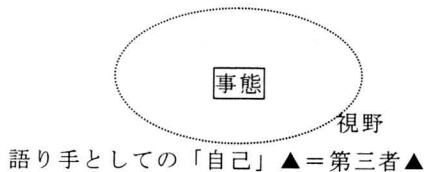


図4(a)

自己分離型  
（英語）

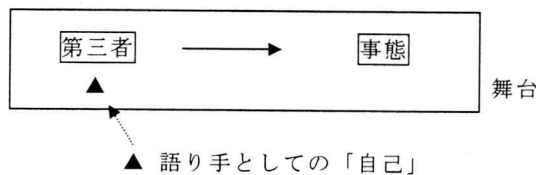


図4(b)

前節で見たとおり、談話のデフォルトは、発話視点の一貫性を保証するものであるが、談話に話し手以外の第三者が関わったとき、自己投入型の視点と自己分離型の視点の違いが、どのように立ち現われるのか、まず次の英文から考えてみることにしよう。

(7) But a novel is to be read with enjoyment. If it doesn't give the reader that, it is, so far as he is concerned, valueless. In this respect every reader is his own best critic, for he alone knows what he enjoys and what he doesn't. [視点 1 (P1)]

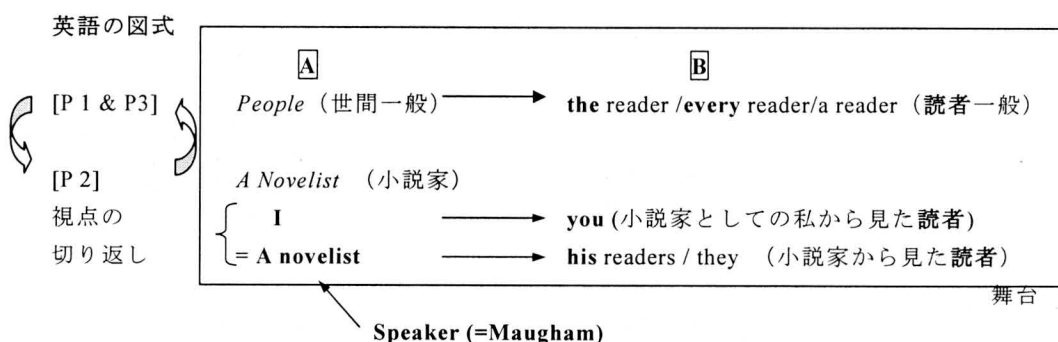
I think, however, that the novelist may claim that you do not do him justice unless you admit that he has the right to demand something of his readers. He has the right to demand that they should possess the small amount of application that is needed to read a book of three or four hundred pages. He has the right to demand that they should have sufficient imagination to be able to interest themselves in the lives, joys, and sorrows, tribulations, dangers and adventures of the characters of his invention. [視点 2 (P2)]

Unless a reader is able to give something of himself, he cannot get from a novel the best it has to give. And if he isn't able to do that, he had better not read it at all. There is no obligation to read a work of fiction. [視点 3 (P3)]

– W. S. Maugham, *Ten Novels and their Authors* (Cf. 織田 2002: 55-60)

作家と読者の関係を述べた短い談話ではあるが、その中で、両者をとらえる視点が微妙に入れ替わっていることが見てとれる。冒頭の部分（視点1）に含まれる読者は、every

reader/the reader の表現からわかるように、一般論としての「読み手」のことである。ところが、次の部分（視点2）では、みずから作家でもある Maugham の視点が前面に押し出されることによって、読者を指す人称が変わる。つまり、私(I)が書く文章を読んでくれている「皆さん」(you)としての読者が登場するのである。しかも、その一方で the novelist（作家）に対する his readers（読者）という関係が、いわば重層的に盛込まれる形になっている。さらに、最後の部分（視点3）で、作家と読者の関係をとらえる視点に、もう一度切り返しが起こる。すなわち、a reader という表現に代表される一般論としての「読み手」という捉え方で、これは談話が最初の視点（視点1）へと回帰したことを意味する。自己分離型の視点で展開される談話においては、舞台の外にいる筆者（=Maugham）が舞台の上にいる第三者を通して「読者」を見ることができると同時に、みずからを舞台に据えて「読者」をとらえることもできる点に注目したい（図5を参照）。



それでは、同じ談話が、自己投入型の視点で展開する日本語ではどのようなようになるのだろうか。以下の訳文を見てみよう。

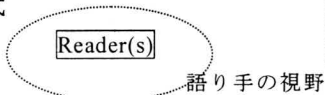
- (8) この点から言って、**読者**(the reader)は誰も自分自身が最良の批評家である。何が楽しく読めるか、また読めないかが分かるのは、当の**読者**その人(he)だけだからである。だが、その一方、小説の作者のほうでは、**読者**(his readers)からあるものを要求する権利があることを認めようとしないならば、その**読者**(you)は作者に対して不当であると主張することだろうと思う。事実、小説家には、三、四百ページの書物を読むに要するわずかばかりの勤勉な努力を惜しまぬことを、**読者**(they)に要求する権利がある。（西川正身訳）

英語のような決定辞（冠詞、代名詞）が日本語には欠如していることも本質的には関わっていると思われるが、ここでは深く立ち入らないことにしよう。むしろ、英語の談話ではバリエーションのあった「読み手」の指し方が「読者」という表現一つに収斂している点に目を向けたい。

自己を登場人物に同化させる視点においては、作家としての「私」が見ても、一般論としての「作家」の視点から見ても、あるいは特定の「作家」の目を通して、語る相手は本質的に「読者」でしかあり得ない（図6を参照）。「私」に対する「あなた」は想定されるが、少なくとも当事者以外の視点がそこに入り込む余地はない。みずからを当事者と装

う視点において、英語のような「彼の読者」という部外者的表現はおかしい。それだと、語り手の視野に入っている（私/あなたとは）別個の人物を想定しなければならなくなる。

#### 日本語の図式



(自分の)読者 → 自分はゼロ形 ∴「読者」  
読者一般 ⊃ 自分の読者

図 6

自分の作品を読んでくれる人であれ、彼の作品を読んでくれる人であれ、語り手の視点から見た読み手は、「自分の」という表現は通常必要ないのですべて「読者」という表現に還元され、これは読み手一般を指す「読者」と何ら不都合をきたすことなく重複する。よって、日本語においては、総称的な「読者」も個別的な「読者」も、すべて「読者」という単一の表現が引受けることによって、自然な談話の流れが確保されることになる。別の言い方をすると、日本語の傾向として、デフォルトの視点は、あくまでも語り手自身でなければならないのである。

#### 5 複線的視点と単線的視点

山本（2002: 137-147）は、語彙的結束構造の観点から、〈言い換え〉を基本とする英語の談話と、〈繰り返し〉を基本とする日本語の談話について触れ、その原因を追求することなく、これらを各言語特有の特質として処理した。たとえば、次の談話に現われる the President と the golfer は同一人物 (George) を指している。

(9) Without looking up, the President gripped the putter and studied the next ball. (...) The golfer (=George) looked up briefly and smiled, then returned to his game. - J. Grisham, *The Pelican Brief*

日本語では両者をそのまま「大統領」/「ゴルファー」と訳したのでは不自然で、前者に対しては「大統領のジョージ」、そして後者に対しては「ゴルフに興じるジョージ」とする必要がある。

このように、同じ対象を異なる表現で指示することは、実は今回問題としている視点のありようと結びつけて考えると説明がつく。つまり、自己分離型の視点においては、舞台上のいわば基準点を經由して指示対象に迫るため、基準点の性格によって潤色された表現がその対象に与えられることになるのである。

#### 英語の図式



図 7

たとえば、George という人物を語り手が描写する際に、舞台上の仲介者 (=基準点) とし



て世間一般の人々を想定すれば、その人々にとっての彼の位置づけ、すなわち「大統領」のレッテルがふさわしい。他方、友人として場面を共有している語り手自身が仲介者（＝基準点）になれば、いま目前で繰り広げられている光景をもとに「ゴルフに興じる男」というレッテルが、より臨場感に富む表現として選ばれることになる（＝図7）。

ところが、自己投入型の視点の日本語では、常に「私」の目に映る George を描写することになるため、その人物は基本的に George でしかあり得ない（＝図8）。百歩譲って他の名称を許すにしても、たとえば語り手にとって友人としてのアイデンティティが高ければ高いほど、公的な地位を示す「大統領」や、一時的に従事する動作に基づく「ゴルフに興じる男」というレッテルは、むしろ談話の自然な流れを阻害してしまうのである。

日本語の図式



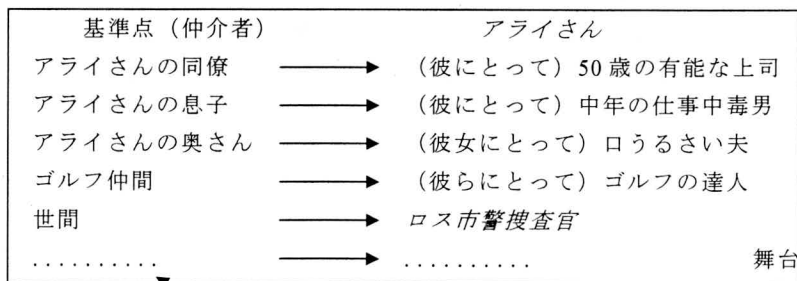
図 8

もう一例、日本語の談話を考えてみよう。語り手の視点から描写する日本語においては、確かに話題になっている「アライさん」は、「アライさん」でしかない。

- (10) 彼女は、私にアライさんというロス市警の捜査官を紹介してくれた。食事どきに落ちあったが、アライさんのほうに予定があって、たがいにコーヒーだけを飲んだ。アライさんは長身で、粗い織りのブレザーがよく似合う陽気な好漢だった。アライさんのかつての上司は、有名なジミー・佐古田氏である。私は佐古田氏書いた『ロス市警アジア特捜隊』という本を読んでいたので、アライさんを見たとき、ドラマの中から出てきた人物のような印象を受けた。かれはブレザーの内側に銀色のピストルをもっていた。（司馬遼太郎 『アメリカ素描』）

しかし、語り手が対象を描写するときに、舞台上の仲介者を経由することが要求される自己分離型の視点では、「アライさん」を示す表現は、基本的に仲介者の数だけ存在してもよいわけで、実際上は無限個の選択肢をもつことになる（図9を参照のこと）。

英語の図式



Speaker (語り手としての「私」)

図 9

このように考えると、語り手が登場人物と同化してしまう自己投入型の視点は、常に自己と相手、あるいは自己と事態の関係性に収斂するという意味において〈単線的〉視点で

あるとってよいだろう。一方、舞台上の仲介者を通して対象を描写する自己分離型の視点は、基準点となる仲介者の数だけ異なる見方が成り立つという意味において〈複線的〉視点だといえる。そうすると、日英語の語彙的結束構造に見られる違いの根本には、実はこのように単線的に固定された（＝日本語）、あるいは複線的に分岐する（＝英語）、いわば視点のタイポロジーが存在するのだとってよいのかも知れない。

## 6 視点のタイポロジーの可能性—コミュニケーション、教育、文学、そして文化へ、

一つのテーマを通して語り手が読み手にメッセージを伝える文学作品は立派なコミュニケーション活動である。文学においては、語り手の意識の流れや視点の移動を、読み手が敏感に察知できなければ、作品の究極的なメッセージを読み取ったことにはならない。たとえば、(7)として引用したようなささやかな談話においてさえ、語り手は巧みに視点を切り替え、そうすることによって読み手とみずからの距離を調整し、メッセージのもつインパクトに濃淡をつけている。文学というコミュニケーションは、鑑賞する側が、そのデリケートな変調や転調に気づくだけの言語的感性を備えていなければ成立し得ないものである。いわゆるオーラルコミュニケーションがもてはやされる時代にあつては、「文学」を口にすることさえタブー視される傾向があるが、そういう研ぎ澄まされた言語的感性を育成することこそ、むしろコミュニケーション教育が本来目指すところではなかったか。もちろん、そのためには、文学作品を「和訳」するだけの教育は排除されなければならないが。

一方、自己投入型と自己分離型という日英語に見られる視点のタイポロジーは、主として英語学（あるいは認知言語学）のテーマであるが、談話という概念を記号論的に拡張することによって、より興味深い洞察へとつながる可能性を秘めている。たとえば、西洋の庭園は、見る人に対して見られるもの、つまり見る側に何らかの意味を伝える象徴として造営されている。そこに配置された植物も石も装飾も、すべては何かを意味する表象として舞台上で役割を演ずる役者であり、庭園の来訪者はこれを外から眺める観客といえる。ところが、龍安寺に代表される日本の石庭では、その空間を占める石や植物には象徴的意味が込められているというより、来訪者がみずからの視線でそれぞれの角度から空間を体験することにより、そこに流れる美を主観的に読み取る仕組みになっている。<sup>3</sup>まさに、記号論的操作を前提にした西洋庭園の背景には、自他の区別を明確化し、自己までも客体化する自己分離型の視点と通底する思想があり、日本庭園には、場に自己が埋没させる自己投入型の視点と共鳴する思想があるといえる。単純なステレオタイプに陥らないよう十分な配慮は必要であるが、視点のタイポロジーは、言語が紡ぎ出す談話の世界にとどまらず、広く文化的な現象を読み解く一つの手掛りにもなると思われる。<sup>4</sup>

\*謝辞：本研究の一部は、平成15年度関西大学学部共同研究費において、研究課題「英文学と英語学の融合から外国語コミュニケーション教育を見直す」として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

### 注

1. このように話し手の視点には、少なくとも自己分離的なものと、自己投入的なものがあるといえる。そうすると、Haviland (1996:297-80)でも指摘されているように、話し手

の視点を中核とする〈ダイクシス〉(deixis)という概念そのものも本来的に多義的にならざるを得ない。すなわち、外界を記号化した世界のなかに位置づけられる、同じく記号としての「自己」(origo)と、現実の世界に生身の存在として関わっている「自己」(origo)の両義性である。ダイクシスの中心となる「自己」には、このように二つの様式が考えられる点が以下の議論では重要である。

2. 語彙項目が引き金となって誘導されるデフォルト推論など、詳しいことは山本(2002)を参照されたい。
3. 中沢新一(2004:193-201)を参照のこと。
4. 同じ宗教的神秘体験でも、仏教では自他の境界が消滅する「空」(リアリティーの欠如)の体験へと向かうが、キリスト教では「キリスト降臨」(絶対的リアリティー)の体験へと向かうという(Newburg et al. 2001: 154-190[邦訳版]を参照のこと)。たとえば、自己投入行為を徹底すると、みずからが場面の中に埋没し、自他の境界さえ危うくなる可能性がある。他方、自己までも記号化して分化させる自己分離行為においては、救済主のイメージのみに精神を集中させることによって、記号化された自己と絶対的存在者がリアリティーをもって一体化してしまう可能性がある。もちろん、この点については、綿密な議論を積み上げる必要があるが、言語から見た視点のタイポロジーが宗教のタイポロジーとも接点をもつ可能性は排除できない。

#### 参考文献

- Haviland, J. B. (1996) "Projections, transpositions, and relativity" In Gumperz G. G. and S.C. Levinson (eds.) *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 271-323.
- Kuno, S. and E. Kaburaki (1977) "Empathy and syntax" in *Linguistic Inquiry*, Vol. 8, No. 4, 627-672.
- Langacker, R. W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Newberg, A., E. d'Aquili, and V. Rause (2001) *Why God Won't Go Away*. (邦訳: 茂木健一郎監訳『脳はいかにして〈神〉を見るか』(PHP 研究所))
- 池上嘉彦(2004)「日本語の中の「Subjective Construal」(日本認知言語学会第5回大会シンポジウム・カンファレンスハンドブック)、pp. 200-203.
- 織田稔(2002)『英語冠詞の世界』東京: 研究社.
- 中沢新一(2004)『対称性人類学』東京: 講談社.
- 山本英一(2002)『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』大阪: 関西大学出版部.